



鎌倉時代、文永二年（一二六五）宗祖、日蓮大聖人が上総国鷺巣（千葉県茂原市）の小早川家（現在の大本山鷺山寺）に滞留の折、国家平穏の祈願をこめたところ、十一月酉の日、明星がにわかに動き出し示現したと伝わる尊仏が妙見大菩薩です。七星がその宝剣をかざして鷺の背に立つ姿から、「鷺明神」「おとりさま」と呼ばれてきました。

長國寺の妙見大菩薩は、北斗七星がその第七星、破軍星を戴いて頭頂した妙見菩薩です。古来より北斗七星と北辰星（北极星）は妙見菩薩となつて衆生を吉方に導き、破軍星は武運長久を守護するとされました。また七曜を長國寺の寺紋とするのは、その紋章が妙見菩薩の表象であるためです。この妙見大菩薩は出現が十一月酉の日、よってその日をご開帳日と定め、以来開運招福の守り本尊として広く尊崇されています。



## 法華宗 鷺在山 長國寺／浅草田甫・西の寺

〒111-0031 東京都台東区千束3-19-6

TEL. 03-3872-1667

■長國寺ホームページ <http://otorisama.jp/>

■酉の市ホームページ <http://torinoichi.jp/>



長國寺は寛文九年（一六六九）に現在の地、浅草千束に移転。鷺妙見大菩薩は明和八年（一七七一）に本山第五十世、長國寺第十三世・日玄上人により当山へ移し勧請されます。當時は本堂のほか諸堂を配した大伽藍があり、鷺妙見大菩薩が安置された番神堂は妙見堂、鷺大明神の社、鷺の宮と呼ばれました。焼失再建を繰り返しながらも、檀信徒家の外護により平成二年に山門、平成四年に本堂を落慶し現在の寺容となりました。

開山より、西の寺長國寺は歴史の変遷の中、法華經を依教として法燈絶えることなく今日に至っています。



## 鷲妙見大菩薩のご開帳は、十一月酉の日に。

この鷲妙見大菩薩は、鷲大明神とも呼ばれ、開山の頃より「おとりさま」として厚い信仰を集めました。当時よりご開帳の日、十一月酉の日に門前市が立ち、それが現在の浅草「酉の市」の発端となっています。

当日は、午前0時に大太鼓の合図で

読経が始まり、鷲妙見大菩薩の安置される厨子の扉が開かれます。本堂内がすべて清められると本堂正面に祈祷師が立ち、参詣に訪れた人々に向けて開運招福を祈念します。そして一堂に会した参詣者の威勢のいい手縛によって、いよいよ市が始まります。

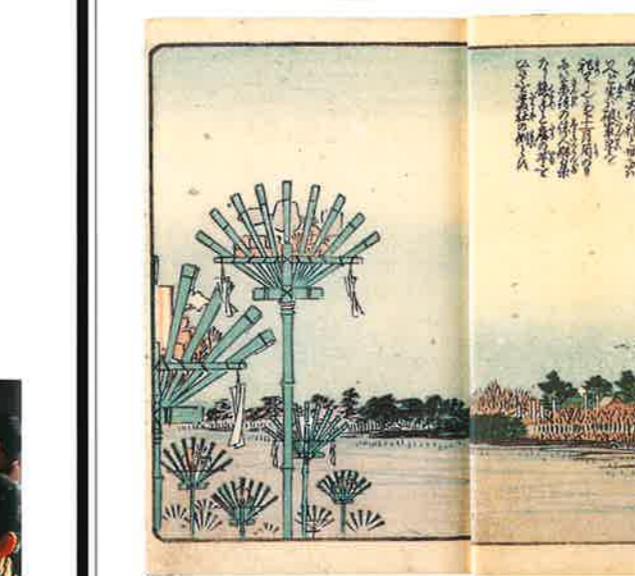
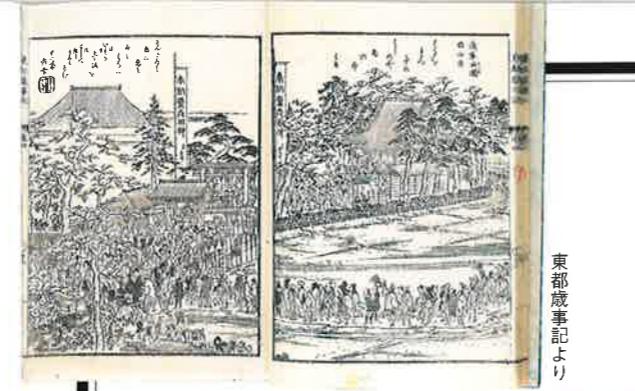
本堂内陣

## 西の寺・長國寺と、酉の市の賑わいは江戸時代より、さまざまな文芸に描かれています。

江戸の中頃より賑わいを増した浅草酉の市。おかげや作り物の大判小判を飾った「縁起熊手」が、財や福をかき込み、掃き込むと、商売繁盛を願う人々に持て囃されました。一方長國寺では、小さな竹の熊手にたわわに実る稻穂をつけた開運招福のお守り「かつこめ熊手」を出しています。また人の頭にと願う「頭の芋」、金持ちになる「黄金餅」など洒落の効いた縁起物が江戸っ子の評判となり、青竹の茶筅や今戸焼の人形が売り出されたことありました。

町人による文芸が花開いた江戸で、酉の市の盛況ぶりは格好の主題とされ、「春を待つ事の始めや酉の市」と其角に詠まれたり、数多くの隨筆や

錦絵に登場します。中でも歌川広重が描いた『絵本江戸土産』(第六編)には



## 明治時代の神仏分離令の後も、伝統を守つて現在まで。

明治時代の神仏分離令により、当山は酉の寺長國寺と鷲神社に分かれ、各々が酉の市を開くようになります。現在も十一月酉の日に鷲妙見大菩薩のご利益を求めて数多くの人が訪れています。当寺では江戸の頃より変わらぬ開運招福のお守り「かつこめ熊手」を授けておりそれを縁起熊手につけて、より一層の福を願う諸人の姿があります。

一年の無事に感謝し、来る年の幸いを願う酉の市。ここ浅草は江戸の頃より、最も賑わう酉の市といわれて参りました。そして、当山山主として日蓮大聖人の大願そのままに法華經の功德をひとりでも多くの皆様に伝えたいと念じております。

